

## 第2章 創 設



## 第1節 創設までの経緯

### 創設までの経緯

富山県は古くから農業県であったが、反面、工業立県を目指して、電源開発が行われ、化学工業等の産業が振興されてきた。一方、本県にはまた、特殊な産業として、配置家庭薬産業が古くからあったことは衆知のとおりである。教育機関は、人口100万に対して比較的充実していたが、医療福祉の面ではやや立ち後れの感があった。しかし、昭和30年代後半、吉田富山県知事の時代、富山県が新産業都市の指定を受けて以来、産業の振興が一段と拍車をかけられるようになり、富山県民の総生産も急速に伸びるに至った。このような状況の中にあって、地域医療の向上充実を目指して、医学教育機関設置の必要性が叫ばれるようになり、日本医科歯科大学構想や富山県立医科大学構想が打ち上げられた。しかし、医科大学と附属病院の開設となると、莫大な資金を要することから進展をみるに至らなかった。その後昭和47年田中内閣により一県一医科大学の方針が打出され、具体的現実性をもつようになった。

昭和47年7月、国立富山大学医学部誘致期成同盟会の名のもとに、中田県知事から次の要望が富山大学長および各学部長にもたらされた。

#### 要 望 書

富山県における医師不足の解消と医療水準の向上をはかり、もって成人病をはじめとする各種疾病対策、へき地医療対策、救急医療対策、公害対策及び公衆衛生諸事業の充実強化を期するため、国立富山大学に医学部をぜひ設置されるよう要望いたします。

なお、受入れのための諸準備については、地元として、できる限りの協力を申し上げたいと存じますので、なにとぞ百万県民の宿願に応えて、昭和50年の開校を期し、昭和48年度予算にこの創設準備費を計上されますよう特段の御高配をお願い申し上げます。

昭和47年7月

国立富山大学医学部誘致期成同盟会

会長 富山県知事 中田 幸吉郎

当時富山大学では、後藤学長の時代、いわゆる大学紛争の収束期であり、教育研究両面にわたる立ちおくれを取り戻すのに必死であった。そして一方、工学部の五福地区移転問題も十年来の重要懸案事項であり、医学部創設に対して十分な対応ができなかった。

しかし、県は富山大学医学部構想の実現に向けて具体的検討を進めるため検討委員会を設置したので、これに呼応し、富山大学評議会は大学独自の委員会を設け、各学部長、薬学部では大浦評議員がこれに加わり、兩三度の検討委員会がもたれ、敷地の視察も行ったが、48年5月段階で、県側から医学部構想を中断し、単科医科大学構想に切り換えることを通告してきた。他方、富山大学薬学部では、附属和漢薬研究施設を附属研究所に独立昇格させることと、学部13講座に加えて14講座として、環境衛生分析学の講座増設を目指し、昭和48年4月から積極的に努力していたので、富山大学としては一つ仕事が減ってほしかったのが実情であった。

昭和48年6月、林学長が就任したころ、すでに医学部設置のための概算要求の素案が富山大学事務局でまとめられていたが、参考のためにこれを県側に提供した。その後昭和48年9月、県では国立富山医科大学誘致期成同盟会のもとに、国立富山医科大学準備特別委員会が置かれた。委員会は、金沢大学、新潟大学、千葉大学の医学関係教官で構成されている。

国立富山医科大学の設立によせて

国立富山医科大学準備特別委員会

昭和48年9月

国立富山医科大学誘致期成同盟会

上記パンフレットの内容については省略するが、地域の特色を持たすために、和漢医薬研究施設、環境衛生研究施設（いずれも仮称）を附置するのが望ましいと記述されているが、富山大学としては競合するものであった。

しかし幸いなことに、48年12月30日大蔵省内

示によって、和漢薬研究所の設置と講座増設が内定し、一方県で要求していた医学教育機関の調査費が認められた。

49年6月、正式に富山大学附置和漢薬研究所が発足した。当時、無医大県より医学教育機関設置の要望が相次いだことから、新設医大はそれぞれの地域の特徴を生かしたものを優先するとの国の方針により、富山医科薬科大学構想が急浮上してきた。

7月5日富山大学部局長懇談会が開催され、林学長から富山医科薬科大学構想について、薬学部、和漢薬研究所の意向が問われた。7月11日、林学長、山崎学部長、安岡事務局長は文部省に出頭し、医科薬科大学への転換について種々協議した。その後、薬学部、和漢薬研究所両教授会で審議を重ねるとともに、学外の薬学関係者とも協議し、合意を得た。7月26日、薬学部・和漢薬研究所合同教授会において、「富山医科薬科大学」創設に参加する方向で努力することが決定され、7月31日、富山大学臨時評議会において「富山医科薬科大学」構想が了承された。

当時の経緯と構想について次の資料を掲載する。

学園ニュース 富山大学№15  
昭和49年11月 富山大学発行  
国立富山医科薬科大学について  
学長 林 勝次

「富山県に国立医学教育機関が設置されることが正式に決定したのは、昭和49年度創設準備費が国会で予算化された48年度通常国会期末の昭和49年4月であった。これは、無医大県から脱却したいと念願する富山県から提出された医科大学設置の要求によるものであった。

昭和42年以来、富山県は、医学教育機関設置の方針をたて、積極的な活動を展開してきたが、当時、富山大学では学内事情がきわめて困難なときであったので、これに関する具体的な運動についてはほとんど県当局において行われていた。その後、47年6月富山県から富山大学医学部設置の要望もあり、本学としてはこれを正式に取り上げることになり、評議会内に医学部設置検討小委員会を設けて検討することとなった。しかしながら、これは工学部

の五福移転計画と競合する結果になる点が憂慮されるむきもあり、10年来の懸案であった工学部移転が優先されるべきであるとの有力な意見も学内にあったことは否定できない。

国立医学教育機関設置の早期実現を望む富山県は、48年6月に至り、政府の医大新設方針における医科大学優先への転換に応じて、国立富山大学医学部としての誘致から国立富山医科大学誘致へと方針を切り替え、その受け入れ態勢を固めたいので、この趣旨を了承のうえ引き続き誘致実現に協力してほしいと大学へ要請してきた。

このような事情から富山大学としては、48年度当初、後藤前学長の任期満了直後の評議会において、昭和49年度医学部創設準備費の概算要求をしないことについて、特に異論もなく承認された。それと同時に、前記の設置検討小委員会も解散され、概算要求書も作成段階半ばにして棄却された。

昭和48年12月末、昭和49年度国立医学教育機関創設準備費が計上され、昭和49年3月、従来の慣習に基づき文部省から富山大学が準備大学としてその創設準備に当たるように依頼された。私としては、かねてより医薬共存は自然の姿であり、薬学部の飛躍的發展を期するとともに、和漢薬研究所も治療部門を備えるべきだという将来計画をかねてより持っており、薬学部をもつ国立14大学のうち、富山大学を除く他の大学にはすべて医学部が併置されている現状からも、医学部創設の希望を捨て切れず、富山大学医学部としての設置に転換することについて、再三にわたり文部省に要請を続けてきた。この要請によって、本年6月下旬、文部省において、薬学部等の将来を考慮するならば、医学部構想のほかにも、医科薬科大学構想のごときが考えられるとの弾力的な意見の交換がなされた。又、富山県及び地元関係者としても地域医療の観点から単科医科大学構想のほかにも医科薬科大学構想についても考慮するようになったものと思われる。

一方、本年度創設準備費のついた他の4大学は単科医大としての創設準備を進めており、富山大学だけが医学部として構想することは、極めて難しい状況になってきていた。7月11日に、改めて文部省から医科薬科大学構想についての示唆があり、これを検討することにして、まず当事者である薬学部及び和漢薬研究所の意向を打診した。

薬学部及び和漢薬研究所では、懇談会、教授会を経て7月26日、医科薬科大学創設に参加する方向で努力することの意思決定をした。これをうけて、評

議会はその意向を承認したものである。評議会としては、徹底的審議を尽したとはいえぬかもしれないが、すでに昭和50年10月開学が予定されている関係から、やむをえぬものがあるとして承認されたものである。

薬学部と和漢薬研究所を富山大学から切り離すことは本学としては遺憾なことであるが、これは薬学部、和漢薬研究所教授会の決定に基づいたものであり、これによって将来の拡充発展が望まれるものであることを考えるとき、分離はやむをえざるものといわねばならない。

富山県における国立2大学が、全く無関係の大学ではなく、富山大学とその分身としての医科薬科大学として密接な連絡、提携を保ち、学問、研究の協同の場を拡げていくばかりでなく、教職員の交流等も将来の問題として考えるべきである。

さらに、富山大学における工学部の五福移転、文理学部改組、経済学部の貿易学科新設、教育学部、教養部の整備充実、大学院の設置等、大学の当面する問題に取り組んでいかねばならない。

大学には種々の困難な問題が山積しているとき、富山大学教職員学生のかたがたのご理解とご協力をお願いするものである。」

学園ニュース 富山大学№15

昭和49年11月 富山大学発行

医科薬科大学創設参加について

薬学部長 山崎 高應

「数年来政府が、最近10年の高度経済成長のひずみによるさまざまな社会的矛盾に対する反省の上に立って、人間尊重と福祉社会建設の一環として、一県一医科大学の構想を打出したことは、歓迎すべき政策といわねばならない。このことは、あたかも、明治に入って政府が近代国家の形成を目指して、西洋の文物、政治行政の仕組み、さらには、それまでの漢方医学に代わり、西洋医学を導入するため、文教政策の一つとして、東京法科大学や東京医科大学を創設したのと同様の意義を有するものである。このようにして、今回富山県にも医学教育機関が創設されるに際して、薬学部が医薬一体とする真の総合性と協力態勢を充実させるため、あえて医科薬科大学の創設に踏みきったものである。

我が国の国立大学は従来総合大学の構想を採用してきたところが多く、戦後新制大学が、教育の民主化と機会均等を基本姿勢として発足したときも、複合大学または連合大学構想をもって出発したが、こ

れもまた政府の文教政策であった。しかし、いずれの場合も、真に学問教育の総合性において、実のあるものがあつたであろうか。例えば、戦前東京帝国大学医学部は、医学科と薬学科とからなりたっていたが、両者は同一学部でありながら、真の医と薬との総合性、協力態勢が築かれていたとはいひ難いではなかろうか。このことは、殆んどすべての大学に共通して言えることであり、某々大学では、理学部と工学部とが、あるいは医学部の基礎と臨床が仲が悪いとかいうようなことは、度々聞かれることである。そのようなわけで、医と薬とをとってみると、その総合性、協力態勢の欠如が、やがては、サリドマイド奇型児、スモン病につながっていないとは、断言できるであろうか。

数年来各大学が過去いわゆる大学紛争を経験し、それぞれの改革案が出されながらも、大学自治の根幹をなすものは学部の自治であるという思想が貫かれる限りにおいては、しばしば、学部の利害が先に立ち、総合性の実を期待することが困難である現実も無視できないことを理解されたい。私は実地調査のため来県した与野党国会議員の文教委員の諸氏にもこれらのことを申し上げたのであるが、十分の理解を得たものと思う。真の総合大学とは、単に学部の数が多くなり、大学がマンモス化することではなく、実のある総合性が教育研究の両面において具体的に発揮されてこそ総合大学であり、薬学部は、このような深い反省のもとに、真の医と薬との協力態勢の実現を目指して、医科薬科大学の創設に参加することに決した。さらに一地方に、小さいながらも、二つの国立大学が設置され相互に啓発しあうことは、将来両大学が一層の充実発展するに必ずよい影響を与えるものと信じる。

薬学部が医科薬科大学の理念として掲げたいことは次の如くである。

本来、医学と薬学とは車の両輪ともいうべき、極めて親近な学問の領域であり、特に今日、医と薬との学際的教育と研究の推進充実を図ることは、直接人類の福祉にかかわる緊急な課題であると考えられ、併せて、富山大学と和漢薬研究所は、従来の西洋医薬に対する補完的役割を果たすばかりでなく、医と薬との架け橋的存在ともなり得ると信じ、この際、富山に国立医科薬科大学を創設することは、医薬それぞれの主体性を発揮しながら、なおかつ、上述の学際的教育研究を推進するにふさわしい環境を与えるものとして、その意義は深いと考える。

以上のような理念を建学の精神として、我々は、

富山県におけるメディカルセンターとしての医科薬科大学の創設に参加することに努力するとの意思決定をしたのである。薬学部と和漢薬研究所が、富山大学から切離されることは、富山大学としては遺憾な点もあるが、それによって、富山大学の総合性が失われるとは考えたくない。それよりも、先述の如く、二つの大学が存在することによって、互いに啓発しあえるならば、両大学にとって一層よい結果が期待できると信ずる。何とぞ富山大学の全教職員、学生の皆さんのご理解を得たいものである。」

学園ニュース 富山大学№15  
昭和49年11月 富山大学発行  
和漢薬研究所について  
和漢薬研究所長 大浦 彦吉

「わが国においては、従来、外からの影響を重要視し、外国文化に対して異常な関心を示す反面、日本固有の問題や日本人自身の内発的な創造的活動に対して、偏見や先入観からしばしば軽視されることが指摘されてきた。

明治以来、すべての学問が欧米の基準で理論づけられ、体系化され、その枠の中に入らないものは捨て去られてきた傾向がある。そのため自然科学の分野でも明治期において大きな断絶が形成されたといっているであろう。

最近、西欧合理主義の行きづまりとともに、日本の伝統的な文化の再発見の動きが各方面で見られるようになってきた。

医薬品の面でも、サリドマイドによる衝撃的事件を発端として、多くの医薬品による副作用、薬害の影響が大きな社会問題となっている。

和漢薬は、大部分は古く中国から伝来したもので、西欧医薬学の大幅な導入に至るまで、わが国の治療の主流をなしてきた。その間、名実ともに和漢薬とする努力が行われ、同化されてきた薬剤である。華岡青洲による麻酔薬の研究などはその代表的なものであろう。

しかし、明治以来、和漢薬そのものの製剤や処方続けられてきたにもかかわらず、欧米で問題にならない故か、一般に学会では和漢薬の評価や学問的意義の追求が忘れ去られてきたのである。

このような傾向に対して、「和漢薬は何故に今日でもかなり多くの量が使用されているのか。」という疑問から、さらにその治療効果を発揮するのは、どのようなメカニズムによるのか。この経験的薬物を科学的に解明すべきであるという目的から、昭和38

年、薬学部には附属和漢薬研究施設が設置された。

以来、11年を経過し、5部門となり、本年6月7日、和漢薬に関する全国で唯一の国立研究機関として附置研究所が認められたのである。

この間、昭和42年より毎年和漢薬シンポジウムを開催し、本研究所は、わが国における和漢薬研究の近代化に関して中心的役割をはたしてきたのである。しかし、研究は未だその緒についたばかりであって、今後一層の努力を要する。

また、本研究所は和漢薬の研究に最も重要な臨床治療部門を欠いており、富山医科薬科大学の附属病院に期待するところが極めて大きいといわねばならない。

今後、臨床治療診療部門との接点を発展させ、西洋医学、東洋医学を包含した新しい医学薬学の進展と、医療に貢献することを目標として努力したいと考えている。」

その後、8月6日に国立富山医科薬科大学協力会が設立された。また、国立富山医科大学誘致期成同盟会が当日開催された総会において国立富山医科薬科大学誘致期成同盟会と名称を変更し、8月23日、設置についての要望書を関係各省に提出した。

### 第3回

国立富山医科大学誘致期成同盟会総会

と き 昭和49年8月6日 午前10時30分  
ところ 富 山 県 民 会 館 401号室

国立富山医科大学誘致期成同盟会

財団法人国立富山医科薬科大学  
協力会設立総会

と き 昭和49年8月6日 午前10時  
ところ 富 山 県 民 会 館 401号室

財団法人国立富山医科薬科大学協力会

## 殷

## 要 望 書

ぜひとも、昭和50年度予算に国立富山医科薬科大学の創設費を計上のうえ同年10月に開学を図っていただくよう格段の御配慮をお願いしたい。

富 山 県  
国立富山医科薬科大学誘致期成同盟会

さらに、昭和49年8月16日付をもって、文部大臣裁定に基づく富山大学国立医学教育機関創設準備室が発足し、林 勝次創設準備委員長、平松 博準備室長、小林 収、山崎高應、大浦彦吉の各準備委員が発令された。委員会が活動を開始したのは9月であるが、10月末、文部省より創設準備委員会に対し、富山医科薬科大学の検討課題として次のことが提示された。

- 1 医科薬科大学創設の理念
- 2 医科薬科大学の教育の目標
- 3 医科薬科大学の基本構想（アカデミックプラン）
- 4 医科薬科大学の教育研究組織
  - (1) 医学部、薬学部、和漢薬研究所、附属病院、一般教養
  - (2) 学部にかわる研究組織等
- 5 管理運営組織
 

参与、副学長、学部長等
- 6 医学部、薬学部等の教育研究組織
 

一医薬一体又は医薬の境界領域の教育研究組織のあり方—

  - (1) 医学部の講座編成 大講座制の採否
  - (2) 薬学部の講座編成
  - (3) 薬学関係の臨床部門の講座又は研究部門編成
- 7 一般教育
  - (1) 教養部設置の有無
  - (2) 設置しない場合の担当教官のはりつけ
  - (3) 一般教育教官の富山大学からの移籍
  - (4) 一般教育のカリキュラム

## 8 専門教育

- (1) 医学のカリキュラム（6年一貫の採否）

- (2) 薬学のカリキュラム

- (3) 医薬一体の特色をいかすカリキュラム

## 9 附属病院

- (1) 診療科、中診等附属病院の全体構想—大学附属か学部附属か—

- (2) 診療科のあり方—薬学の臨床部門との関係—

- (3) 薬学の臨床部門の位置づけ

- (4) 薬剤部のあり方

## 10 大学院 医学・薬学研究科

- (1) 医学の大学院

- (2) 薬学の大学院

- (3) 大学院の教育研究組織—研究所との関係—

## 11 地域と大学の関係—開かれた大学のあり方、関連教育病院、地域医療、副学長、参与制（性格論、法的根拠）—

- (1) 地域医療との関係

- (2) 地元薬業界との関係

## 12 薬学部、薬学大学院及び和漢薬研究所の設置廃止の年次計画

## 13 薬学部、和漢薬研究所分離後の富山大学の将来構想

## 14 開学までのスケジュール

以上の検討課題をめぐって、創設準備委員会では、数回にわたり会議を開催し、文部省と十数度の協議を経て、50年1月末までに開学に必要な基本的骨格を定め、基本構想が出来あがった。

昭和50年4月2日、改めて文部大臣裁定によって、平松教授が富山医科薬科大学創設準備室長事務取扱となり、富山大学経済学部内旧図書館の一角に創設準備室が置かれ、50年4月22日法律が公布された。

富山医科薬科大学		富山大学	
富山県		富山県	
薬学部	医学部	工学部	経済学部
に改める。		富山大学	
		富山県	
		工学部	薬学部
		経済学部	教育学部
		文理学部	文理学部

国立学校設置法の一部を改正する法律をここに公布する。

御 名 御 璽

昭和五十年四月二十二日

内閣総理大臣 三木 武夫

法律第二十七号

国立学校設置法の一部を改正する法律

国立学校設置法（昭和二十四年法律第百五十号）の一部を次のように改正する。

第三条第一項の表中

富山大学

富山県

文理学部  
教育学部  
経済学部  
薬学部  
工学部

を

ここで、文部大臣裁定が二度出されていることは注目にあたいる。すなわち、49年8月の裁定は、「富山県に設置される医学教育機関に関する文部大臣裁定」であり、50年4月のそれは、「富山医科薬科大学に関する文部大臣裁定」であって、富山医科薬科大学創設が本決まりになって、初めて裁定が出し直されたのである。

教官人事も比較的順調に進み、内定者も決定し、昭和50年10月1日、富山医科薬科大学開学とともに、平松 博学長、小林 収副学長、山崎高應副学長が発令され、富山県立総合衛生学院（富山市西長江）教育棟1階に暫定校舎が置かれた。

暫定校舎では、富山医科薬科大学 教育研究棟、附属病院および附属図書館を始めとする諸施設の配置等が検討され、別記の各種委員会が発足した。

また、新入学生受入れのため入学試験管理委員会のもとに、富山大学教官の協力を得て入学試験実施の準備も順調に推移し、51年3月、医学部は県立富山中部高校、薬学部は富山女子短期大学において入学試験を実施し、合格者205名を発表した。

昭和51年4月1日、事務局、一般教育担当教

官、基礎医学担当教官の研究室が中部高校旧校舎（芝園町）に設置され、新入学生をこの仮校舎で迎え、1年間講義実習を行った。

仮校舎の中部高校旧校舎には十分なスペースがなかったため、暫定校舎の富山県立総合衛生学院に暫定臨床研究室が設置され、医療担当の副学長室、臨床教官研究室、事務室がここにおかれた。昭和51年4月発令の臨床担当の教官は内科、外科、産婦人科の教授、助教授計6名であった。

昭和52年4月、杉谷地区に講義実習棟、福利厚生棟が完成し、中部高校旧校舎から移転したが、県立総合衛生学院の暫定臨床研究室はそのまま継続し、ここに附属病院創設準備室が設置された。

昭和53年3月末、杉谷地区に待望の医学部研究棟が完成したことにより、この暫定臨床研究室は廃止され、開学以来2年有余にして、ようやく基礎・臨床共に杉谷地区に集中した。次いで54年2月附属病院完成・3月に事務局管理棟・薬学部研究棟・共同利用研究棟および附属図書館が完成した。薬学部教官は、富山大学薬学部から年次計画にしたがって、昭和51年度から毎年、逐次3講座、4講座、5講座、2講座



の計14講座が移籍した。

54年10月には大学附属病院が開院、55年3月には和漢薬研究所研究棟が完成し、5部門が移行した。これにより富山大学からの移転が完了し、ここに大学の全容が整った。

なな、紙面の関係上、学科目・講座・診療科等の開設については資料編（年譜）を参照されたい。

最後に富山医科薬科大学協力会に感謝したい。

昭和49年8月、中田富山県知事を発起人として「財団法人国立富山医科薬科大学協力会」が県、市町村および政財界の熱意により発足した。

その目的は富山医科薬科大学の創設準備に必要な施設・設備の整備、図書の購入、その他関連事業の推進と、それに要する資金の募金活動であった。

創設準備事業の円滑な推進には、この協力会の全面的な協力、支援によるところが大きいものであった。

協力会の事業概要は次のとおりである。

# 1 募金活動事業

## (1) 期間

昭和49年9月1日

～昭和53年3月31日

## (2) 対象

県内企業団体等

## (3) 募金額

569,460千円

# 2 実験実習用器具および図書の購入事業

## (1) 実験実習用器具 1,669点

## (2) 図書 10,958点

# 3 その他の環境整備事業

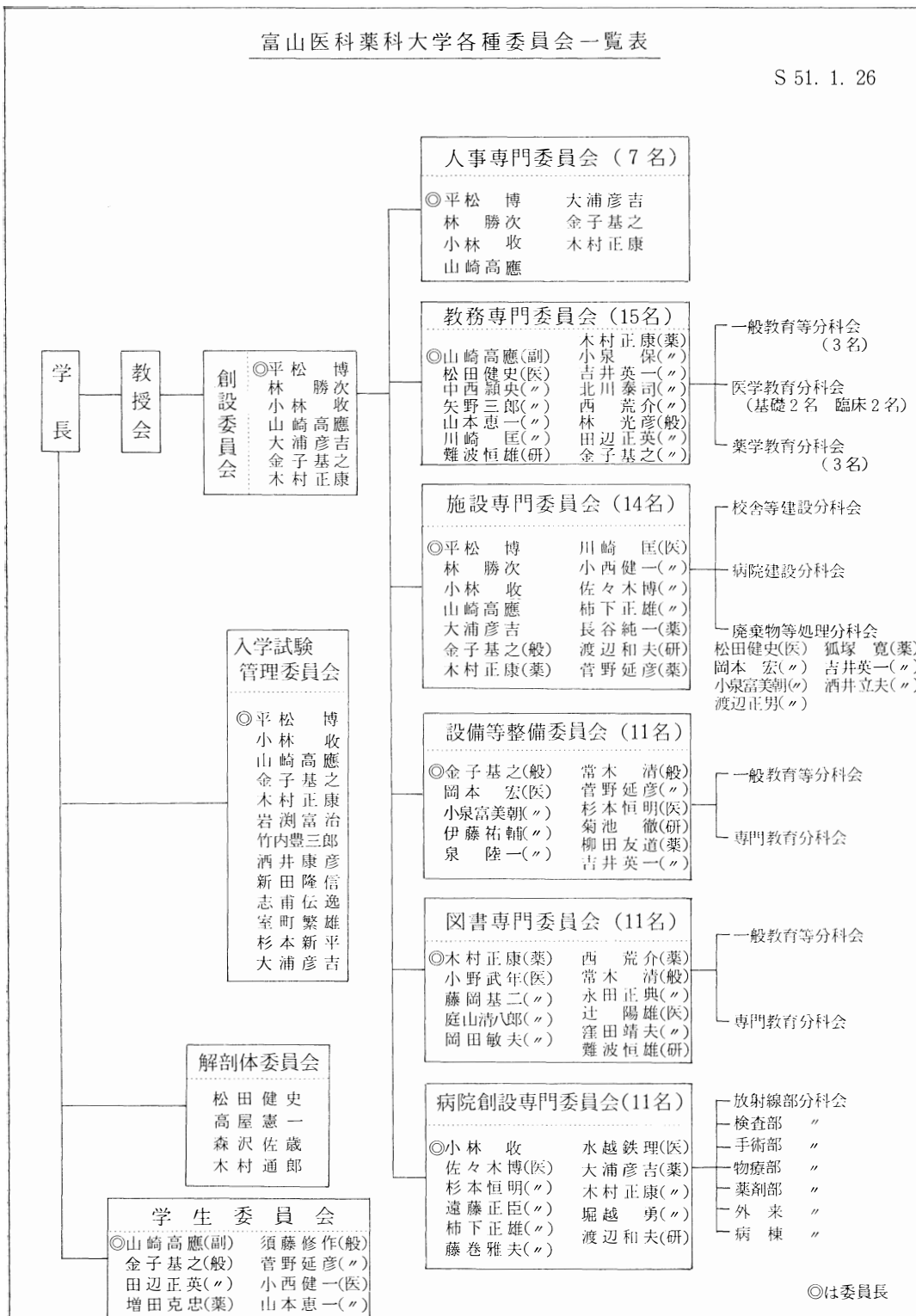
特別高圧電気引込工事等各種環境整備

# 4 教職員用暫定住宅の借上げ事業

このように、県民の願いをこめてできた我が大学であることを銘記して、教育・研究・医療に邁進してこそ、地域の福祉に奉仕することができる唯一の道であることを忘れてはならない。

## 富山医科薬科大学各種委員会一覧表

S 51. 1. 26



## 第2節 座談会

### 創設準備にあたって

平 松 博(学 長)  
小 林 収(副学長)  
小 澤 光(副学長)  
山 崎 高 應(教 授)  
(前副学長)  
大 浦 彦 吉(教 授)  
(前和漢薬研究所長)

(司会) 田 辺 正 英(教 授)

**田辺：**本日は、お忙しいところご出席いただきましてありがとうございます。本学も、いよいよ10月10日に「施設竣工、附属病院開院記念式典を行うことになりました。開学以来4・5年でこの杉谷のキャンパスも大変立派に仕上りました。この間先生方にはご苦勞をいただいたのですが、記録に留めたいこと、ご苦心されたことを含めて、大学の創設をめぐる問題あるいは将来構想にまつわるお話をしていただきたいと思います。

最初に、医学教育機関創設という基本的な構想は、昭和42年頃から県の段階で出てまいりまして、開学は、昭和50年10月でございますが、それ以前に創設準備委員会の段階、準備室の段階があるわけです。さらに全国的な医科大学構想のうちからユニークな医科薬科大学構想ができあがったわけで大変ご苦勞の多い構想であったと思うのです。基本構想をまとめられるまでの経過をまず学長からお話をさせていただきます。

**平松：**私が、この問題について聞いておりましたこと

とは49年6月頃に、富山には国立の医科薬科大学ができるということでその時点ではどんな形でできるのかということは聞いておりませんでした。7月の終りに富山大学の林学長さんからお電話がありその構想を聞いたわけです。



**山崎：**県では、昭和40年代の初めから、日本海医科



大学あるいは単科の医科大学などいろいろ話があったらしいのですが、47年に県の財政ではとても無理ということで医学部をつくってほしいと申し入れがあったので医学部設置のための特別

小委員会をつくろうということで富山大学評議会にはかったのが後藤学長の時代で、それで各学部長に話しかけ、薬学部の場合は大浦先生が評議員であったので、各学部長、薬学部の方では大浦評議員で小委員会をつくっていただいたのです。これが48年3月頃の段階でありました。

**田辺：**学長が就任されたときには、すでにキャンパスは杉谷に決まっていたのでしょうか。

**平松：**決っていてかなり具体的でしたが48年4月段階では医学部構想でした。

**山崎：**48年度の段階で富山大学評議会内の小委員会では医学部構想でした。県の公室長も入って検討しましたがまとまりませんでした。しばらくして単科の医科大学にすることによってこの小委員会は解散されました。これが林学長就任の直前の48年5月の段階でした。

**田辺：**学長が、準備室長に請われた段階では医学部と薬学部との医科薬科大学になると確定していたのでしょうか。

**平松：**確定していたと思うんですが、その方向で準備にかかりました。

**田辺：**準備室の前の段階ではいろいろ相談を受けられたのでしょうか。

**平松：**49年8月に室長になってからですね。

**田辺：**小林先生は……。

**小林：**いっしょでした。

**山崎：**自民党の文教委員の間では、単科の方が良いとのことで単科医大としたかったのではないで



しょうか。

**小澤**：全国的な医科大学をつくるという構想に対し  
て薬学部を組み入れた、医学と薬学を一体化するという大学をつくろうとしたのは、自然発生的なものか強力な推進力がどこにあったのですか。



**山崎**：48年頃に県の方から医学部構想の申し入れがあったのですが、富山大学工学部の五福移転問題をかかえていたので医薬大構想が生まれてきたのは49年ですね。これには、外部特に県、文部省上層部の意向が強く、49年7月中旬以降の段階で、もし薬学部が参加しないのなら、富山医科大学は後廻しにすると文部省の意向であったようです。

**田辺**：全国で医科大学構想が出てきて、1県1医科大学となったんですが、富山大学の薬学部がいっしょにやるというのは、小林先生が協力大学としての重要なスタッフになられた時点でどの程度話があったのでしょうか。

**小林**：全然なかったですね。

**山崎**：49年7月段階に薬学部教授会で、積極的に参加する方向で努力することになったが、この時の薬学部、和漢薬研究所はまさに、清水の舞台から飛びおりる気持でありました。勿論、協力大学の先生方とは接触していないわけです。

**小澤**：医科薬科大学構想に対し、具体的にはいろいろあったと思うんですが。

**山崎**：その当時、49年4月段階では医科薬科大学構想は無かったわけで、文部省に、「薬学部があって医学部の無いのは富山大学だけだが、新たに医科大学ができるとそれと薬学部の関係をどうするか」ときかれたことがあります、「急にそんなことをいわれても、県の段階では医科大学方針でやっていくといっているもので……」とのことだったので、特に意見をはさむ余地がありませんでした。

**田辺**：気運が出てきたのはもっと後になると思うんですが、福井医科大学と競合するということから、今迄の基盤あるいは、富山大学の薬学部と

和漢薬研究所を生かしながら福井よりも先行しようとしたのではないのでしょうか。

**平松**：室長に発令されてまもなく、林学長から正式に「医科薬科大学で準備している」と話がありました。

**山崎**：49年5月に県の坂本公室長から、文部省あるいは県レベルでの構想として、医科薬科大学にしたらかどうかという意向があることをききました。

**田辺**：49年8月16日に平松先生が室長に、小林先生が準備委員に発令されたわけですが。

**山崎**：第1回の打合せは49年9月3日ですね。

**大浦**：そのさきに、概算要求の関係から、7月の評



議会で薬学部、和漢薬研究所が富山大学から医科薬科大学に将来移管されることが決定しています。また、杉谷地区は医学部構想の小委員会で、二・三現地を視察し最良の地であると決定し

ていました。さらに、医科薬科大学構想は意見として学内にもありましたし、またメディカルセンターとして統合しようとしたわけですが。

**田辺**：ところで、準備室長、準備委員も決まりいよ



いよ教官の採用、いろんな構想をつくらなければならない段階に入ったわけですが、薬学部、研究所については富山大学から切り離すというところに問題があったらと思います。医学部

については、教官を集めるのに新設医科大学と競合するので大きな苦心があったと思いますが。

**小林**：基本構想をつくるのに苦労しました。教官集めは翌年に入ってからでした。

**田辺**：他の医科大学のことも参考にされて、カリキュラムのことや教養課程をおかない一貫教育というふうなことも……。

**小林**：そうです。文部省から各医科大学は何か特徴を出せという注文があり、医科薬科大学として教育・研究面でお互いに協力すること、附属病院は医学部附属ではなく大学附属とし、医学部と薬学部の接点、また和漢薬研究所と医学部の接点とするという構想に達しました。さらに、一

つ研究テーマを出せということで本学は医薬一体ですから、当時の文部大臣が「薬害」という言葉を使って薬害の撲滅をうたってはしいとのことから医原性病態の研究を特徴にしました。

**山崎：**構想のうちには、医原性病態研究センターというのもありました。

**田辺：**ところで関連病院として県立中央病院が決まりましたが、その協力体制はどういう形でくまれるようになったのでしょうか。

**小林：**初めから大体決っていたようで、関連病院がないとできないんですね。100 人を教育するにはベッドが800 いるんです。ベッドを600 にしぼって200 は関連病院で臨床教育を行ってその4分の1程度は実施して戴くということですね。

**田辺：**医学部ではなく大学附属というユニークな病院で、薬学部と和漢薬研究所を含めて医学部と共同して行う治療についてはどういうふうな構想で考えられていたのでしょうか。

**大浦：**富山大学の研究施設の時代から、臨床研究部門を強く要望していたのですが、接点としてこんどできる大学の臨床部門とタイアップしてゆけば研究も非常に発展するのではないかと考えたわけです。

**山崎：**そういう意味で「特殊診療部」として「和漢診療部」を要求したのも構想の一つですね。

**大浦：**結果として和漢診療室として認めてくれているのではないかと考えられますが。

**小澤：**将来のビジョンの問題として、大学病院で医療薬学ということから市民に寄与できれば、また薬の安全性が確立できるような教育、医原性疾患の治療に参加できるような新しい分野の教育、研究を推進してほしいと思います。

**田辺：**一般教養に関する問題として、他の大学ではかならずしもそうではないんですが、3学期制をとることになったのは構想の論理から出てきたものでしょうか。

**山崎：**そのとおり、他の大学を参考に一貫教育を行うために3学期制を構想としました。

**田辺：**現在、一般教育の問題あるいは3学期制とがからみあって多少の問題が出てくるのは今まで

昔の総合大学の医学部と薬学部の流れと新構想の医薬大との流れがつかないような形になっているからでしょうか。

**山崎：**単科大学の例をみると一般教養課程、教養部というものは無いのですが、一般教養は一般教養としての考えをもってやっているのですね。

**田辺：**カリキュラムの問題として単科の医科大学ですと比較的一般教育の先生を選ぶ際、医学部のカリキュラムに結びつくようにやりたいという考えが出てくるんですが、医学部と薬学部があるため、ある程度一般教育の独立性をもたせたいという構想があったと思うんですが。

**平松：**一般教育のありかたとして、医と薬は非常に近い領域ですから講義の内容もそれに近づけるようにして、先生もそういう人を、またそれに近いような人を選んだと思います。

**田辺：**医学部の教官の問題について、出身の各大学のそれぞれの独自性がありましてなかなか融和しにくいという問題が世間ではいわれているんですが、新しい大学をつくるにあたっては、どういう苦心をされたのでしょうか。

**小林：**苦心というよりも、医学部の教官を選考する場合には1人であろうが3人であろうが必ず公募します。全国的に公募した中から融和や専攻を考慮して選んだわけです。したがって初めからこの大学をどうのということにはなかったですね。要は、業績と人柄ですね。

**田辺：**大学によりましては教官選考について、時間がなかったので非常に苦心をしたときいていますが。

**山崎：**50年度予算が決まったあとでないと公募ができないんですね。

**小林：**公募は4月からでした。

**大浦：**締切りは5月10日だったと思います。

**山崎：**開学は、50年10月ですが、51年4月に学生を受け入れるときは医学部は8講座でした。しかし、30講座全部の先生を決める必要があったため時間的余裕はなかったですよ。

**田辺：**薬学部の場合、最終的にはどうだったのでしょうか。

**山崎：**積極的に参加する方向で努力することにはな

っていましたが、最終的に参加を教授会で議決したのは50年1月24日でした。3, 4, 5, 2講座の年次移行計画で、和漢薬研究所は53年度に一度に移行し、同時に大学院をも発足させる予定でした。

**平松**：50年4月1日で正式に医科薬科大学とするという大臣裁定が出ていますね。

**田辺**：薬学部の決議に対し、富山大学全体の同意を得なければならなかったと思うんですが。

**山崎**：3週間しかなかったうえ、対外的な理解を得る必要もありました。

**田辺**：それでは、開学し、発足してからあらわれた問題として、大学院設置のことについて……。

**山崎**：53年度から2専攻で発足させる予定でしたがそのためには、薬学科・製薬化学科にそれぞれ6講座が必要なんで薬学科の2講座を最終年次に移行することにしたわけです。50年当時、医学部は、30講座あっても1専攻だから薬学部でも1専攻としたいと考えていたのですが、14講座もあるため既成概念が働いて2専攻と考えられていたわけです。ところが、51年になって、文部省から医療薬科学なら医学部とタイアップした福祉医療を中心とした大学院で必ずしも2専攻にしないで14講座も10大講座制にしたらどうかといってきたわけです。

**田辺**：いまの講座制は大学院とのかかわりがあつての話ですか。

**山崎**：そうです。それで51, 52年度は2学科で学生をとったわけです。

**田辺**：ところで和漢薬研究所が遅れたのですが、最初から遅れることに……。

**大浦**：学生の教育が優先されますし、研究所の移管は53年単年度でいけるということでした。

**山崎**：しかし、大学院をつくるには研究所は必要なんです。

**田辺**：医学部とも関係が深いんですか。

**山崎**：学部大学院方式ですが、研究所や医学部の先生方の協力を得なさいといってるわけで、小林先生にお願いして医学部はまだ完成していないんですが53年度に発足するまでに来られる先生にお願いすることになったわけです。

**田辺**：医学部から薬学部に協力をして行くということで、ある意味では現実にはプラスになっている面もあるんですが将来の問題としてはどうでしょうか。

**山崎**：医学部は6年制ですが、大学院学生が講義を受けてくれるんで心配はしていないんです。

**田辺**：技術的な問題は解決していけると思うんです。そこでこれからの問題として大きいのはキャンパスの問題なんです。37万㎡もあり他の単科大学にくらべてキャンパスは大きいとは思ってていたんですが、実際的には今は殆んど一杯であるという形なんです。今後の問題として、キャンパスを大きくしなければならないこと、本学を中心とした地域の総合計画を解決しなければならないと思うんですが、今後のこれからの見通しといいますか、要望といいますか、このところを学長いかがでしょう……。

**平松**：要するに土地の取得の問題ですが、さらに、必要とは思いますがとりあえず完成を急いで県・市、地域に貢献できるようにしなければならないと思います。講想としてはいろいろあるんですが、例えば医療短大の問題ですが先発校の例もありいろいろ考えて行かなければならないと思います。

**田辺**：そういうことになりますと、今まで県、市民全体から全面的に協力していただいたと思いますが、さらにそのみかえりとして地域医療に対する医療センターの意味で病院の特色としてこれまでの医科大学、医学部とちがうところがありましたら……。

**小林**：地域医療だけでなく、学生の実習の場として工場の従業員の検診があります。第一の特色として、特殊薬剤部としての和漢診療室があります。今迄の生薬というより一歩出た西洋科学的あるいは現在の薬学的、医学的な解析を加えたものと思っています。

**田辺**：一見したところ附属病院の機構などがすばらしく感じられるんですが、他の大学とくらべていかがでしょうか。

**小林**：予算、人員ともに他の大学と全く同じなのですが、地方県の中核病院としての機能を発揮す

るため中央診療部の拡充を第一に重点としております。

**田辺：**薬学部、研究所に対し附属病院としてこうあってほしいということは……。

**小林：**薬害ですね。薬害を未然に防ぎ、予知するということで薬剤部に研究部門を設けています。他の大学とちがう特色を出すようにしておりますので予算、人員の拡充が望まれるわけですが、実績を挙げることも必要なことでしょう。

**田辺：**医学部の定員増、大学院、医療短大の設置計画は……。

**小林：**将来計画にはあります。

**田辺：**話はちがいますが、海外との交流またスリラ

ンカなどから研究協力の要望があります……。

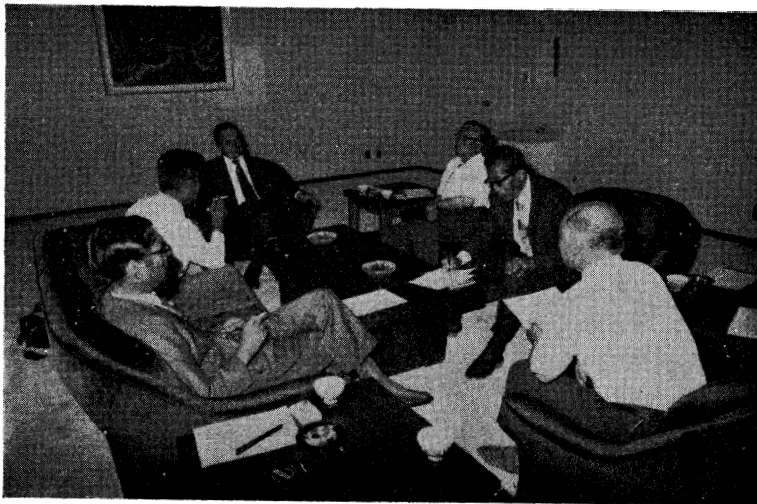
**山崎：**なるべく交流、協力をしたいと考えます。

**田辺：**学長、今後の方針として……。

**平松：**最初に苦心して作った構想あるいは予想通りには行かなかったと思いますが、方針に沿って今後とも発展するよう富山県民に支えられて、伝統のある大学としたいと考えています。

**田辺：**本日は長時間にわたって、当面する問題、創設までのいきさつ、苦心などいろいろ話し合いをいただきまして、これからの進むべき方向等に多大の示唆がえられたことと思います。

どうもありがとうございました。



「学園だより」第5号より転載（54.10. 1）

## 第3節 評議会・教授会

### 評 議 会

昭和51年6月23日第5回および7月14日第6回医学部教授会ならびに、昭和51年6月16日第3回および7月7日第4回薬学部教授会において、「富山医科薬科大学評議会規則」（案）が審議、承認された。

昭和51年9月10日第1回富山医科薬科大学評議会が平松学長、小林・山崎の両副学長、須藤・松田・矢野（医学部）増田・田辺・木村（薬

学部）の各評議員全員が出席して開催された。

当日の主な審議事項は次のとおりであった。

- 昭和51年度当初予算配分案について
- 国家公務員の週休二日制の試行について
- 評議会定例開催日程について
- 校章について

なお、第2回以降の定例評議会は毎月第4金曜日の14時から開催されている。

#### ○富山医科薬科大学評議会規則

**第1条** 国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則（昭和28年文部省令第11号。以下「省令」という。）に基づき、富山医科薬科大学に評議会を置く。

**第2条** 評議会は、次の各号に掲げる評議員をもつて組織する。

- (1) 学長
- (2) 副学長
- (3) 各学部長及び研究所長
- (4) 各学部の教授 各3名
- (5) 附属図書館長

2 前項第4号の評議員は、各学部の教授会において当該学部の専任教授のうちから選出する。

**第3条** 第2条第1項第4号の評議員の任期は、2年とする。ただし、補欠の評議員の任期は、前任者の任期の残余の期間とする。

2 前項の評議員は、再任されることができる。

3 第1項の評議員は、任期が満了した場合においても、新たに評議員が任命されるまでは、同項の規定にかかわらず引き続きその職務を行う。

**第4条** 評議会は、学長の諮問に応じて次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 学則その他重要な規則の制定改廃に関する事項
- (2) 予算概算の方針に関する事項
- (3) 学部、学科その他重要な施設の設置廃止に関

#### する事項

- (4) 人事の基準に関する事項
- (5) 学生定員に関する事項
- (6) 学生の厚生補導及びその身分に関する重要事項
- (7) 学部その他の機関の連絡調整に関する事項
- (8) その他大学の運営に関する重要事項

2 評議会は、前項に掲げる事項のほか、教育公務員特例法（昭和24年法律第1号）の規定によりその権限に属せしめられた事項を取り扱う。

**第5条** 学長は、評議会を招集し、その議長となる。

2 学長に事故があるときは、あらかじめ学長の指名する副学長が議長の職務を代行する。

**第6条** 評議会は、評議員の3分の2以上の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議決を要する事項については、出席評議員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

**第7条** 議長は、必要に応じ評議員以外の職員を評議会に出席させることができる。

**第8条** 評議会の庶務は、事務局において処理する。

#### 附 則

この規則は、昭和51年8月1日から施行する。

#### 附 則

この規則は、昭和53年6月27日から施行する。



## 医学部教授会

昭和51年4月14日、中部高校旧校舎において医学部専門教授懇談会を開催し、医学部諸規程その他学部運営に関する意思決定機関を早急に確立する必要があるという意見が出された。また、学級担任制を設けることが了承された。

昭和51年4月28日、暫定校舎において医学専門教授打合せ会を開催。議事として「医学部教授会組織について」がとりあげられ、次の試案が提出された。

(1)医学専門講座教授および一般教育学科目担当責任者で構成する「拡大教授会」

(2)教授のみを構成員とする「教授会」

以上2本立てとし、教員の人事および予算に関する重要事項については(2)の教授会で審議する。なお、医学専門分野に限った議事がある場合は打合せ会方式をとる。

以上の試案について種々審議の結果、この試案を骨子として次のような案が決定された。

(1)教授会は学部長、教授および学科目担当の責任者をもって組織する。ただし、教官の人事ならびに予算に関する重要な事項については学部長および教授をもって構成する教授会で審議する。

(2)教授の選考にあたっては、一般教育ならびに専門教育におけるそれぞれの分野に所属する教授をもって構成する会議で審議し、教授会がこれを了承するものとする。

この打合せ会に引きつづき、医学部教官打合せ会が開催された。ここで前記の決定案について審議、異議なく承認された。なお、この打合

せ会において、教授会員相互の親睦のための水曜会が発足した。

以上の医学部専門教授打合せ会、医学部教官打合せ会を経て、同日引き続き第1回医学部教授会が開催された。

主要な議事は以下のとおりである。

### 1) 助手の採用について

昭和51年度医学部助手定員3名のうち、細菌免疫学講座助手1名の採用について審議、承認。

### 2) 早急に開催を迫られている次の委員会委員の選出。

施設整備委員、教務委員、病院創設委員、献体委員。

### 3) 毎月、第2、第4の水曜日に教授会を開催することを決定。

昭和51年5月12日、第2回医学部教授会が開催されたがここで議題としてとりあげられる筈であった教授会規則は未だ事務局にて検討中であるので、次回の教授会に提案する旨説明があり了承された。

昭和51年5月26日、第3回医学部教授会を開催。事務局より医学部教授会規程案及び附属参考案が配布、説明あり、審議の結果、施行日を昭和51年4月28日として原案通り承認。ここにおいて現行の教授会規程が成立した。この規程が前記の医学部教官打合せ会において決定した案と異っている点は予算の審議に学科目担当の助教授の参加を認めたことである。

### ○富山医科薬科大学医学部教授会規程

**第1条** 学校教育法第59条の規定に基づき、本学部に教授会を置く。

**第2条** 教授会は、医学部及び附属病院の専任の教授（薬剤部の教授を除く。）をもつて組織する。ただし、教授会が必要と認める場合は、学科目担当の助教授（当該学科目担当の教授が欠けている場合に限る。）を加えることができる。

**第3条** 教授会は、次の事項を審議する。

(1) 学部教員及び附属病院教員（薬剤部教員を除

く。）の人事に関する事項

(2) 学科、講座、学科目及び教育研究施設の設置廃止に関する事項

(3) 教育課程の編成に関する事項

(4) 学生の入学及び卒業の認定に関する事項

(5) 学生の成績に関する事項

(6) 学生団体、学生活動及び学生生活に関する事項

(7) 学生の賞罰に関する事項

(8) 予算に関する事項

#### 44 第2章 創 設

- (9) その他学部教育、研究及び運営に関する重要事項

**第4条** 教授会は、学部長が招集し、その議長となる。

- 2 学部長に事故があるときは、学部長の指名する教授が議長の職務を代行する。

**第5条** 教授会は、毎月第2水曜日及び第4水曜日を定例開会日とする。ただし、学部長が必要と認めるとき、又は構成員の3分の2以上の者から要求があるときは、臨時に開くものとする。

**第6条** 教授会は、構成員（外国出張中の者を除く。）の3分の2以上の出席がなければ、議事を開き議決することができない。

- 2 議事は、出席者の過半数の同意をもつて決する。

- 3 教授の人事に関する事項の審議及び表決には、

助教授は加わることができない。この場合において、第1項に規定する構成員数及び前項に規定する出席者数には助教授を含めない。

**第7条** 学部長は、必要に応じ構成員以外の職員を出席させることができる。

**第8条** 教授会の庶務は、事務局で処理する。

#### 附 則

この規程は、昭和51年4月28日から施行する。

#### 附 則

この規程は、昭和53年7月13日から施行する。

#### 附 則

この規程は、昭和54年8月24日から施行し、昭和54年5月9日から適用する。

#### 附 則

この規程は、昭和58年2月25日から施行する。

## 薬学部教授会

昭和51年5月19日第1回薬学部教授会が開催された。

山崎学部長事務取扱より挨拶と報告事項の説明があったあと審議が進められた。当日の主な審議事項は次のとおりであった。

○ 各種委員会委員について

○富山医科薬科大学薬学部教授会規程

**第1条** 学校教育法第59条に基づき、本学部に教授会を置く。

**第2条** 教授会は、学部長並びに専任の教授、助教授及び講師をもつて組織する。ただし、教員の採用及び昇任に関する事項については、学部長及び専任の教授をもつて構成する教授会で審議する。

2 前項の教授会には、附属病院薬剤部専任の教授、助教授及び講師を加えることができる。ただし、同項ただし書の教授会については、専任の教授のみとする。

**第3条** 教授会は、次の事項を審議する。

- (1) 学部教員及び附属病院薬剤部教員の人事に関する事項
- (2) 学科、講座、学科目及び教育研究施設の設置廃止に関する事項
- (3) 教育課程の編成に関する事項
- (4) 学生の入学及び卒業の認定に関する事項
- (5) 学生の成績に関する事項
- (6) 学生団体、学生活動及び学生生活に関する事項
- (7) 学生の賞罰に関する事項
- (8) 予算に関する事項
- (9) その他学部の教育、研究及び運営に関する重要事項

**第4条** 教授会は、学部長が招集し、その議長となる。

施設整備委員会、学生委員会、教務委員会等の各委員の選出。

○ 各種委員会規定について

施設整備委員会規程(案)、病院創設委員会規程(案)、薬学部教授会規程(案)

2 学部長に事故があるときは、学部長の指名する教授が議長の職務を代行する。

**第5条** 教授会は、毎月第1水曜日及び第3水曜日を定例開会日とする。ただし、学部長が必要と認めるとき、又は構成員の3分の1以上の者から要求があるときは、臨時に開くものとする。

**第6条** 教授会は、構成員(外国出張中の者を除く。)の3分の2以上の出席がなければ、議事を開き議決することができない。

2 議事は、出席者の過半数の同意をもつて決する。ただし、可否同数のときは、議長がこれを決する。

**第7条** 学部長は、必要に応じ構成員以外の職員を出席させることができる。

**第8条** 教授会の庶務は、事務局で処理する。

附 則

- 1 この規程は、昭和51年5月19日から施行する。
- 2 第2条ただし書の教授会にかかる第6条の適用については、当分の間、同条第1項中「3分の2」とあるのは「4分の3」と、同条第2項中「過半数」とあるのは「3分の2以上」とそれぞれ読み替えるものとする。

附 則

この規程は、昭和53年10月27日から施行する。

附 則

この規程は、昭和54年8月24日から施行する。

## 和漢薬研究所教授会

昭和53年6月19日第1回和漢薬研究所教授会が開催された。

平松研究所長事務取扱より研究所長が発令されるまでの間、難波教授に議長代行の指名があ

り、報告事項の説明があったあと、次の事項が審議された。

- 和漢薬研究所規程（案）、和漢薬研究所教授会規程（案）

## ○富山医科薬科大学和漢薬研究所教授会規程

**第1条** 富山医科薬科大学学則第11条の規定に基づき、富山医科薬科大学和漢薬研究所に教授会を置く。

**第2条** 教授会は、所長並びに専任の教授、助教授及び講師をもつて組織する。ただし、教員の人事に関する事項については、所長及び専任の教授をもつて構成する教授会で審議する。

**第3条** 教授会は、次の事項を審議する。

- (1) 教員の人事に関する事項
- (2) 研究部門及び研究に関する施設の設置廃止に関する事項
- (3) 諸規則の制定及び改廃に関する事項
- (4) 予算に関する事項
- (5) その他研究及び運営に関する重要事項

**第4条** 教授会は、所長が招集し、その議長となる。

- 2 所長に事故があるときは、所長の指名する教授が議長の職務を代行する。

**第5条** 教授会は、毎月第2火曜日及び第4火曜日を定例会開会日とする。ただし、所長が必要と認めるとき、又は構成員の3分の1以上の者から要求があるときは、臨時に開くものとする。

**第6条** 教授会は、構成員（外国出張中の者を除く。）の3分の2以上の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

- 2 議事は、出席者の過半数の同意をもつて決する。ただし、可否同数のときは、議長がこれを決する。

**第7条** 所長は、必要に応じ構成員以外の職員を出席させることができる。

**第8条** 教授会の庶務は、事務局において処理する。

## 附 則

この規程は、昭和53年6月27日から施行し、昭和53年6月17日から適用する。

## 附 則

この規程は、昭和54年4月1日から施行する。

## 第4節 大学の敷地と古墳

### 大学敷地内の遺跡群

富山市考古資料館主任学芸員 藤田富士夫

大学の建つ杉谷台地には、旧石器時代（約1万3千年前）から中世（約600年前）にかけての遺跡があり、大学建設前の昭和49年に概要を知るための調査が行われた。その後今まで当台地には、旧石器時代遺跡が3、縄文時代遺跡が3、古墳時代遺跡が11、奈良～平安時代遺跡が1、中世（14世紀）遺跡が2で、合計20遺跡の存在が知られている。

大学建設にあたっては、これらの文化財を破壊しないように留意して施設の配置が行われ、多くの遺跡はもとのままで保存されている。そこには、遺跡と大学とが、一体化した環境作りが意識されている。大学の南東および南西側、すなわち富山平野に面した台地縁辺には豊かな緑を見ることができる。この緑地帯が保存されている遺跡ゾーンと重なっている。

これらの遺跡の中でも特色のあるのは古墳時代遺跡で、いずれも古墳が初めて作られたころの「古墳発生期」（約1600年前）に属する。

古墳は、北東から南西に、10号墳（方墳）、9号墳（方墳）、8号墳（方墳）、三番塚古墳（円墳）、二番塚古墳（円墳）、一番塚古墳（前方後方墳？）、5号墳（方墳）、7号墳（方墳）4号墳（四隅突出型方墳）、6号墳（長方墳）といった順に立地する。おたがいに100—150メートルの間隔をおいて営まれ、いずれも富山平野を見おろす台地縁辺にあり、この平野を勢力基盤とした首長墓とみることができる。ここでは、方墳系の多いことが注目される。

方墳は、出雲地方に主流をもち、特に日本海

沿岸に集中的に形成されている。なかでも、杉谷4号墳にみられる四隅突出型方墳は、山陰地方独特の古墳である。それが遠く離れた越中国に出現しているのである。政治的、祭祀的権力者である首長の墓が山陰の墓制を採用しているのは、両地域間の政治的結びつきを示す。

また、この4号墳の前面には杉谷A遺跡があり、方形周溝墓が営まれている。棺をおさめた墓壇のまわりを溝で方形に区画したもので、全部で17基が発掘されている。中央に1基の大型墓を有し、まわりに3～4基の小型墓を配したものが三群から成る。集団内に厳然とした身分差の生じていることがうかがえる。副葬品には、素環大刀やガラス小玉があり、これらは北九州からもたらされたものとみられている。

杉谷古墳群は、越中国の古代国家形成の一時に、日本海をルートとして山陰や北九州の勢力と結びつきのあったことを明らかにするもので、その文化的な価値は大きい。このような文化財と緑に恵まれた環境に大学は立地している。



杉谷A遺跡の方形周溝墓の調査・昭和49年11月（大学南側進入路部分）